News Letter vol.21

Japanese Society for Dance Research

目 次

1. 第75回大会のご案内･･･ 実行委員長･事務局 :海野敏

2. 特報

2-1. 社会と協働し創造する研究者の活動
大阪公立大学 名誉教授 中川 眞 さんに聞く
「ありえるかもしれない、ガムラン（サントリーホール サマーフェスティバル 2023）」
インタビュー:中川 眞(大阪公立大学名誉教授／特任教授)
聞き手:岩澤 孝子（北海道教育大学）

2-2. レポート「境界を揺さぶるガムラン」 岩澤 孝子（北海道教育大学）

3. 国際学会･機関の情報（舞踊学･演劇学･音楽学･パフォーマンス研究）

①東洋音楽学会 小林敦子（明治大学）

②日本演劇学会 宮川麻理子（立教大学）

4. 私にとっての在外研究

「海外生活の綱渡りから学んだこと」 フランス･アメリカ 岡田万里子（桜美林大学）

5. 国際学会･シンポジウム発表報告

EAJS 2021: 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies
山田小夜歌（京都精華大学）

6. 委員会より

6-1. 学会誌編集委員会･･･八木ありさ
6-2. 2023年度学会大会･･･海野敏
6-3. 例会企画運営委員会･･･森立子
6-4. 研究奨励賞選考委員会･･･貫成人
6-5. HP管理委員会･･･寺山由美
6-6. 学術連合委員会･･･貫成人･寺山由美
6-7. ニューズレター委員会･･･波照間永子

7. 事務局だより･･･酒向治子

8. 情報コーナー

「遠藤保子先生をしのぶ会」開催報告
高橋京子（フェリス女学院大学） 野田章子（長崎女子短期大学） 林夏木（四国大学）

編集後記 奥付

1. 第75回大会のご案内

第75回舞踊学会大会のご案内

第75回舞踊学会大会実行委員長　海野敏

第75回舞踊学会大会は、2023年12月2日（土）・3日（日）の2日間にわたって、東洋大学の白山キャンパス（東京都文京区）で開催いたします。

大会のテーマは、「ポストコロナの舞踊と舞踊学ーダンスの未来を考えるー」です。2020年以降、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延は、舞踊界にも深く広い影響を及ぼしました。そこで本大会を、コロナ禍を経た新時代の舞踊と舞踊学について考察、展望する機会にいたします。

一般研究発表では、舞踊に関する多様な20件の口頭発表と、若手研究者を中心とした7件のポスター発表が行われます。また、大会特別企画として、「基調講演」と「シンポジウム」を開催します。1日目の夕方には、4年ぶりとなる対面での「懇親会」を予定しております。

1日目の基調講演は、当学会理事であり、日本芸術院会員の三浦雅士氏に「パンデミックと舞踊の形而上学」というタイトルでご講演いただきます。舞踊は、哲学とりわけ形而上学と深く結びついており、舞踊の研究がいかに人類にとって重要であるかをお話しいただく予定です。

2日目のシンポジウムは、大会テーマと同じ「ポストコロナの舞踊と舞踊学」をタイトルとし、民俗舞踊、劇場舞踊、舞踊教育、舞踊研究の4つの領域から1人ずつパネリストをお招きして実施します。コロナ禍の負の面ばかりでなく、コロナ禍を経て得られた新しい知見や、これからの可能性をお話しいただき、ダンスの未来を共に考える場にいたします。

大会の事前参加登録の締め切りは11月25日（土）です。登録は、右下のQRコードより、お早めにお申し込みください。なお、大会の詳細なプログラム、一般研究発表の抄録、基調講演・シンポジウムの概要は、舞踊学会HPに掲載いたします。資源節約のため印刷資料の配付はいたしませんので、恐れ入りますがご自身でダウンロードしてご持参ください。

学会大会へ奮ってご参加いただきますよう、皆様の登録をお待ちしております。

記

1. 日時：2023年（令和5年）12月2日（土）・3日（日）
2. 会場：東洋大学白山キャンパス（東京都文京区）
3. 内容：一般研究発表

基調講演「パンデミックと舞踊の形而上学」
三浦雅士氏（文芸評論家・舞踊批評・日本芸術院会員・舞踊学会理事）
シンポジウム「ポストコロナの舞踊と舞踊学」
パネリスト　民俗舞踊…吉田純子氏（文化庁文化財第一課）
劇場舞踊…唐津絵理氏（愛知県芸術劇場）
舞踊教育…寺山由美氏（筑波大学）
舞踊研究…齋藤尚大氏（横浜カメリアホスピタル）
舞踊学会総会

以上

2. 特報

2-1. 社会と協働し創造する研究者の活動

大阪公立大学 名誉教授　中川 眞　さんに聞く
「ありえるかもしれない、ガムラン（サントリーホール サマーフェスティバル 2023）」

聞き手：岩澤 孝子（北海道教育大学）

中川 眞（なかがわ・しん）
1951年生まれ。京都大学卒業、大阪大学大学院修了、大阪芸術大学より博士号（芸術文化学）取得。京都市立芸術大学および大阪市立大学で講師・助教授・教授職を歴任し、現在は大阪公立大学 都市科学・防災研究センター 特任教授/名誉教授。専門は民族音楽学・サウンドスケープ論・現代音楽論・アーツマネジメント論・ソーシャルアート論。ガムラングループ「マルガサリ」の創設者であり、現役のメンバーでもある。
主な著書に、『平安京　音の宇宙』(1992)（サントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞）、『これからのアートマネジメント～ソーシャルシェアへの道～』（2011）、『アートの力』（2013）がある。

1. はじめに

2023年8月にサントリーホール（東京）で行われたコンサート「ありえるかもしれない、ガムラン」について、その立ち上げから本番まで深く関与した中川眞教授にお話を伺った。中川教授は民族音楽学者として長年にわたりジャワ（インドネシア）のガムラン音楽に関わってこられた。表現者としてのキャリアも長く、マルガサリの創設者として常に挑戦的なクリエーションに携わってきた。また、民族音楽学以外に、サウンドスケープ/サウンドアート論やソーシャルアート論、アーツマネジメント論など、広範な研究領域において優れた業績を有する。このような学際的で横断的な研究アプローチは中川教授の表現活動、特に社会との協働過程で有機的に結びつくことによってさらなる創造性を生み出している。現代の研究者が社会の一員としてどのようにあるべきかを考える上でも、中川教授の研究と実践との間で生じる創造性は私たちにさまざまな視座を与えてくれるだろう。

今回紹介するのは「ガムランを中心としたコンサート」である。と書くと、伝統的な音楽または現代作品のコンサートを連想するかもしれないが、「ありえるかもしれない、ガムラン」はそうした従来の枠組みを遥かに超えたものであり、舞踊学の立場から見ても刺激的で学びの多いイベントであった。企画やパフォーマンス、作品提示のあり方、そこに集う人々/身体の関係性など、多様な観点から現代社会への問いかけに満ちたこのコンサートは、いったいどのような出来事であったのだろうか。

2. 企画の経緯・趣旨「コンサートではなく、アセンブリー」

岩澤：まず、この企画の経緯について教えてください。

中川：このコンサートに限っていえば、具体的な準備は2022年の夏ですが、私としての準備は2007年ぐらいから始まっていたのではないかと思っています。2007年に大阪のザ・フェニックスホールの主催事業で

2. 特報

マルガサリが招聘されて、三輪眞弘さんや鈴木昭男さんの作品などが上演されました。そのときのプログラム・ノートに私は「これはコンサートではありません。未来の社会あるいは未来の芸術を考えるための集会、アセンブリーです。」ということを書きました。コンサートではなくて、アセンブリーです。そのときを発端として続いていて、今回のサントリーホールでの公演はリアルに具体化したものであると考えているわけです。

ー:コンサートとアセンブリーの違いとは、なんでしょうか。

中川:コンサートというのは通常の作品があって、それを演奏して、オーディエンスが楽しむというものです。アセンブリーは、オーディエンスがもっと参加する、あるいは作品の中に今後の社会をどうしていこうかというメッセージが込められているなど、もう少し幅広い内容を持っています。今回は特にビジュアルアート、美術のアーティストも入って、空間を具体化しています。皆が集まりやすい空間、つまりコンサート空間ではないアセンブリー空間を作るというのが大きな目標でした。それがブルーローズ(小ホール)で実現しました。大ホールは空間的に変えようがないので、見かけは通常のコンサートのように見えています。

3. 社会的メッセージを含む作品の上演

ー:作品の中にも社会に対するメッセージが込められているということについて。特に大ホールでの作品は全て世界初演だったわけですが、作品の傾向について教えてください。

中川:今、全て新作と言いましたが、ホセ・マサダの作品は1997年の作品、再演です。それ以外の四つの作品が、新作です。アセンブリー的な意味、あるいはメッセージ的な意味で最も顕著に出たのは野村誠さんの作品かと思います。舞台の上に通常は登場しない相撲取りや綱引き、ゴルフをする、さまざまな日常の風景が展開されます。そして、単なるミュージシャンだけではなく、いろいろな人が入り込みますし、途中で観客にインタビューをするというものも挟み込んでいます。今の言葉でいうとダイバーシティというのか多様性というのか、いろいろな人が作品を作ることに関係しています。宮内康乃さんの作品もオーディエンスにサウンドスケープ的な音の風景を作るのに協力していただいて、まるでホールの中が森の中になったような空間になりました。平たくいえば参加型ということであるのかもしれません。多くの人が共同して一つのものを創り上げていくという社会です。そして、誰も取り残さない形で参加してもらいたいので、演奏者とオーディエンスとはっきり分けるのではなく、入り交じっています。こういうアートの方法は新しくはありませんが、サントリーホールはクラシックの殿堂のような所で開催されたということに非常に意味があったのではないかと思っています。

4. ガムランの身体性・空間性

ー:今回、私は舞踊学の立場からの取材ということもあって、ガムランの越境性、身体性のよう

2. 特報

なものを非常に強く感じていました。たまたまそういう特徴を持つ作品だったのかもしれないし、あるいはガムラン自体がそういう性質を持っているのかもしれません。また、音楽と舞踊の境界が曖昧になっていくような出来事もありました。その点について、または、ガムランの身体性について、先生のお考えをお聞かせください。

中川：音楽と舞踊の境界が曖昧というのは、どのような感じですか。

しー

ー：クラシック音楽もそうですし、日本でガムランを演奏される方もそうですが、コンサートでの演奏家たちは、自分たちが音楽を演奏している際、舞踊家のようには身体にそれほど意識がいかないというか、身体で表現をしているということに無意識であると私は感じています。しかし、このイベントの中では、舞踊家が踊るから舞踊というわけではなくて、音楽家あるいはその他の参加者のパフォーマンスをする方たちの中から、ものすごく身体的な要素が立ち上がってくるという感じがしていました。

中川：これはガムランだけではなくて、音楽で演奏をするということは音を作っていくことです。音響というものはそもそも身体の動きから発せられるものです。コンピュータのキーボードであっても、キーボードを打つという身体の動きから音が発生するので、必然的に音響というものと身体性は結び付いているわけです。それを私たちは非常に強く意識していることは確かです。ガムランの場合は、その空間性がジャワなりバリなり、インドネシアのコスモロジーと深く関わっているわけです。今回はブルーローズという所でジョグローという面白い伝統的な建築を作りました。例えば東西南北はどうなっているのか、ジョグローの建物の中に楽器はどの位置に置くのかということで、今回はジャワのガムランだったので、ジャワのコスモロジーを意識したわけです。身体が北、ジャワでいうと山の方に向かっているのか、あるいは身体が南、海の方に向かっているのかというのが非常に重視されています。こういった空間性の中で人間が生きているという、一つのコスモロジーの中での、演奏の在り方があります。これについても今回、私たちも強く意識して、ガムランの楽器の置き方を考えるなどしました。きちんと置いてしまうと、まるでジャワのように見えるのではないかという指摘があり、あえて崩そうとむちゃくちゃに置いてみたりしました。私たちの身体性はジャワ的なトラディショナルな身体性から、また新たな空間性の中でどうやって楽器や音を出すことに向きあっていくのかを考えるきっかけになったと思います。

5. 三輪眞弘とありえるかもしれない音楽

ー：ところで、「ありえるかもしれない」というキーワードは、どなたがお考えになったので

しょうか。

中川：三輪さんです。三輪さんは、これまで「ありえるかもしれない音楽」というものを作ってきました。西洋音楽の作曲家は、これまでの音楽の歴史があって、その上に乗っかりながら次のステージを作っていくというわけです。つまり、ある種、連続的な流れの中にあります。ただ三輪さんは、連続的という音楽の世界とは別の隠れている音楽の世界が実はありえるのではないかと考えて、アルゴリズムという作曲の方法で追求してきました。そして、三輪さんはガムランに出会って、驚いたわけです。ありえるかもしれない、もう一つの音楽的な世界が実際にありえたということで、ガムランに取り次いでもらいました。ですので、ガムランと「ありえるかもしれない」というのは彼の中では似ているということです。それは西洋音楽に対するクリティシズムというか、ある種の批判にもなっています。別に西洋音楽に対するアンチという形で出しているのではなくて、ガムラン以外にもありえるかもしれない音楽というのはあるということです。西洋音楽をやりこめるために考えたのではなくて、複数性を意識しています。三輪さんの中には、コロニアルな視点というのはないと思います。私たちもコロニアルな珍しい民族音楽としてのガムランをやっているのではありません。インドネシア以外の人たちも受け入れ可能な音楽のシステムあるいは音響があるのではないかということで、今回のプログラムに取り組みました。

6. マルガサリの挑戦

ー：これまで愛好家や研究者たちが行ってきたような民族音楽のあり方とは異なる挑戦的な立場から音楽を作り、世界を切り拓いてきたマルガサリについてお聞きしたいと思います。マルガサリは日本のガムラングループの中では、どういう位置にあるのでしょうか。

中川：日本で今、アクティブに活動しているガムラングループは100ぐらい、東京には40以上あります。マルガサリは日本の中で考えると、非常に特異な存在であると思います。日本でガムラン音楽をやっている人たちは、いわゆるインドネシアの音楽を日本でやるという、少し悪い言葉でいうとコロニアルな視点を引き継ぎながら楽しんでいるという形のグループが多いと思います。私は1970年代後半にダルマブダヤという団体を設立しました。マルガサリの設立は1990年代後半なので、20年ぐらいダルマブダヤをやって、それから20数年、マルガサリを創設して関わってきました。単なるインドネシアの、民族音楽の紹介ではなく、「私たちの音楽」としてアクチュアリーにどう関われるのかを常に追求してきた結果、レパートリーが他のグループとはかなり違ってきました。古典的、伝統的な音楽にプラスして、新作が非常に多くて、20以上の委嘱作品があります。そして、海外の作品。アメリカやヨーロッパの作曲家たちとその作品を日本で紹介、初演してきました。活動する場所も様々です。今回のようにホールということもあれば、地域、

2. 特報

例えば過疎地域の人たちと一緒にコミュニティ・アート的な形で地域に根付いた形で行うこともあります。あるいは、障害のある人たちと福祉施設等でコラボレーションを行うことも。あるいは大阪西成区に釜ヶ崎という寄せ場がありますが、そこの人たちと一緒に新しい作品を作っています。いろいろな社会のあり方と関わりながら活動しているという点が、非常に特異な感じです。ですから今回、サントリーホールでの公演は、ある意味ではこれらの活動のうちの一つ、小さなパートに過ぎないのです。

ー：ブルーローズで演奏されたマルガサリのオリジナル作品について。あのように、メンバーの中から立ち上がってくる身体性の強い作品というのは、どういう位置付けですか。

中川：作品という捉え方はしていなくて、全部即興的なものです。大体こういうことをしようという約束ごとがあって、練習はしていなくて即興的に行います。一言でいえば、私たちはガムランという楽器で表現していて、その楽器との関わりです。通常の演奏方法以外にもさまざまなアプローチがあるのではないでしょうか。楽器は音を出すだけでなく、美術作品かもしれません。要するに視覚あるいは触覚に訴えるものかもしれません。物体として目の前にある訳の分からない楽器のようなものとどういうふうに関わるのかを多面的に追求しようと思っています。例えば、これまでゴング類をつっている所に人形をつってみたり、あるいは音を出す物の代わりに自分の首を突っ込んでみたり、それを皆さんに見てもらいます。見た人は非常にパンクですと言われますが、パンクをやっているわけではありません。私たちは作曲家が作った作品を演奏するだけでもなく、インドネシアの伝統的な古典的な音楽を演奏するだけでもありません。いろいろなことをやっていますという意味で、ブルーローズで見てもらいました。

ー：ガムランのイメージをすでに持っている方があのパフォーマンスを見たときに衝撃を受けたのではないかと思います。観客や他のグループなど、周りからリアクションはありましたか。

中川：今回、こういう演奏をしてSNSなど、いろいろなところで感想が上げられていますが、こういう作品だったという感想だけで、それは少し残念に思っています。とりわけガムランの関係者からの反応が非常に弱いです。東京で、たくさんのガムラン関係者が来ていましたが、その人たちがどう思ったのか知りたいです。その反応がないのは、非常に残念であったり、問題であったりと感じました。彼らにとって受け入れがたいものだったのかもしれないし、あるいは言葉にできなかったのかもしれません。それ以外の作曲家の方などからは、非常に面白かったという感想がありました。マルガサリのパフォーマンスをすると、反応は賛否半々です。訳の分からないことをやっている、これは何、見るに堪えないという反応と、非常に面白いです、こんなこと見たことがなかったという反応が半々です。ガムラン関係者からの反応がほとんどなくて、残念

2. 特報

です。これは強く言えば、日本のガムラン関係者たちの構造的な問題があるのではないかと思います。

ー：まだまだお聞きしたいことはありますが、残念ながら時間がきてしまいました。本日は、貴重なお話をありがとうございました。

（2023年9月3日 web会議でインタビュー実施）

サントリーホールのウェブサイトより、フライヤーのPDF（2023年10月1日 参照）
https://www.suntory.co.jp/suntoryhall/schedule/detail/20230827_M_2.html

2. 特報

2-2. レポート

「境界を揺さぶるガムラン」

報告:岩澤 孝子(北海道教育大学)

「ありえるかもしれない、ガムラン」は、インドネシアの伝統的な合奏音楽「ガムラン」をテーマとしたイベントである。ガムランといえば、中部ジャワの宮廷で発展した「ジャワ・ガムラン」がよく知られているが、それ以外にも多様な様式が存在する。日本でもその愛好家や演奏団体（およそ100団体ある）は多く、人気の高い音楽ジャンルである。本公演でも、ジャワガムランのみならず、スンダやバリ、バニュマス地方の竹ガムランなど、多様な様式のガムランが集められた。とはいえ、日本のガムラングループがほとんど古典曲に頼らずに3日間（限定公開のオープニングイベントを合わせると4日間）におよぶ音楽イベントを、しかも、西洋音楽の殿堂ともいうべきサントリーホールで行うなんて…「ありえない！」と思ったのは私だけではないだろう。

本公演は、作曲家の三輪眞弘氏がプロデューサーを務め、日本人とインドネシア人アーティストで構成されるアート・コレクティブのKITA、そして、ガムラングループのマルガサリが共同で企画された。空間・音楽・パフォーマンス・舞踊・聴衆と演者の関係・伝統音楽との向き合い方・仮想と現実の共存など、どの角度から見ても、既存の概念を転覆させるような力を持つ内容であった。下記の表に記した多彩なプログラムの全てを紹介することはできないのは残念だが、ここでは公演中に何度も立ち現れた、ガムランを介して境界が揺さぶられた瞬間について、報告したい。

その前に、本公演が異次元のコンサートとなった仕掛け、その空間について触れておく。本公演はサントリーホールの小ホール（ブルーローズ）と大ホールの二ヶ所で行われた。特にブルーローズではアート・コレクティブのKITAによって創り出されたコンサート空間「En-gawa」に圧倒された（写真1）。コンサート空間というより、東南アジアでは野外でよく見かける祭りの世界に

写真1.
2023年8月24日 ブルーローズの舞台・客席セット
（※写真はすべて報告者撮影）

2. 特報

迷い込んだような感覚にさせられる空間である。通常、ブルーローズは舞台と客席が完全にわかれる形式の一般的な音楽ホールとして使用される。しかし、KITAは特設セットによって従来の音楽堂にある境界や方向性に関する常識を崩し、同時に、その空間を完全に否定せず共存する形でデザインしている。事実、中央ステージの存在感が、その場を行き来するパフォーマーや聴衆、そしてスタッフの動線をフレキシブルに変えていた。一方で、KITAが設置した中央ステージの屋根は板などで覆い尽くされず、カラフルなインドネシアの伝統柄をモチーフとしたフレームのみで作られたために、天井を見上げるとフレームの隙間から煌めくシャンデリアが顔をのぞかせる。四方に壁のない東屋のような開放的な屋根付きの構造物を中央にすえ、演者も観客も、ついうっかり境界を超えでてしまいたくなる、「開かれた広場」なのである。

本公演ではこの場所で生じる様々なガムラン音楽に合わせて、あらかじめ振り付けられた踊りを「舞踊家」が舞ってみせたり、即興的に演じてみせたり、と「いわゆる舞踊」の身体も見ることができた。それらももちろん素晴らしかったのだが、今回はあえて、この自由で実験的な空間にあって様々な立場の人々がガムランの音に誘発され、ふるえ、交差し、越境する身体、について言及したい。その例として、《修行》、《礼拝》、マルガサリのパフォーマンス、そして、《タリック・タンバン》の4作品をとりあげる。

まずは、《修行》（三輪眞弘作、マルガサリ演奏）。ブルーローズの四隅のうち二ヶ所に設置された影絵芝居の舞台のようなスクリーン付きのセットへと二人のガムラン奏者がやってくる。彼らはそれぞれ静かにそのセットの上に座すると、透明な細長い台の上に両手を置き、徐に演奏をはじめる（写真2）。彼らは実際には音を出さず、あらかじめ録音された音をスピーカーから

写真2.
2023年8月26日《修行》

2. 特報

流し、演奏する「振り」をしている。同時に、あらかじめ録画されたグンデル（ジャワガムランの楽器の一種）奏者の映像がスクリーン上に映し出されている。スクリーンの向こう側にいるヴァーチャルな奏者とこちら側にいるリアルな奏者が、一つの楽器を共有しながら音響空間が紡ぎ出されていく。そして、彼らが奏でる音楽は、三輪氏作曲の2進数の計算に従って演奏される《4ビット・ガムラン》。コンピュータの演算式がガムランの楽器によって延々と繰り返される、まさに《修行》というタイトルにふさわしいパフォーマンス。この場所で私が目にしたものは、いわゆる舞踊ではなく明らかに「音楽」なのだけれど、リアルな音響創出行為を剥ぎ取られながらも「振り」に没頭する生身の身体を見ているうちに私は舞踊の発露のようなものを感じとっていた。

次に、《礼拝》。この作品もまた音楽は三輪氏による鶏のケチャ（相愛大学有志4名によるドレミパイプの演奏）である。ガムランの楽器は用いられていないが、規則的だが微妙にずれながら進行する音型が複数の奏者によって作り出される音の重なりが擬似的にガムランの音響空間を思わせる。その音楽に合わせてジャワ舞踊家の佐久間新氏が踊った。佐久間氏は長年にわたりインドネシア、ジョグジャカルタで宮廷舞踊の訓練を受けてきたダンサーである。一般に、異文化圏の民族舞踊の担い手にとってその伝統的な枠組みを越え出た試みには困難が伴うものだが、彼はジャワ舞踊の伝統的な身体を理解しそれを体現しつつも、自らの身体的経験を通じて独自の解釈を発展させてきた稀有なパフォーマーでもある。本作では、事前に作成された佐久間アバターの映像を舞台上の佐久間氏（リアル佐久間）がVRカメラで見ながら、自らのリアルな身体をもって共演する、という形式が採用された。観客には彼のVRカメラに映るアバターの身体がどのようなものであるかはわからないのだが、ホールに設置された数台のスクリーンやタブレットには様々な角度からアバターとリアル佐久間の身体が見え、これら二人の像に加えてAR（拡張現実）の仮想的な鶏5羽が自由に動き回る姿が映し出されている（写真3）。この作品はブルーローズでの3日

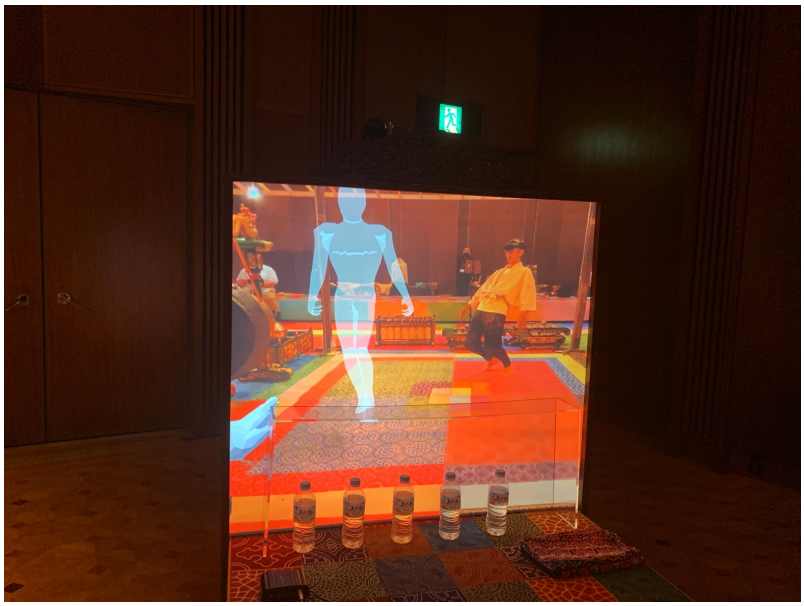

写真3.
2023年8月26日《礼拝》

2. 特報

間に及ぶEn-gawaイベントの中で毎日上演された。アバターの動き自体は同じだが、それと共演する佐久間氏の動きは即興的なものであり、また、各スクリーンに映し出される二人の位置・関係性やARチームがスクリーンに投影する仮想の鶏たちの見え方も毎回異なる。本作品ではバーチャルな身体の介在によって、むしろ上演芸術に関わる人々の役割に関する既存の概念や境界が曖昧化されていた。そして、観客を含むすべての人々が同じ時空を共有しながらもそれぞれに見えている像が異なるという、並行世界（パラレルワールド）の存在がリアルに感じられた。

そして、8月26日のEn-gawaでのマルガサリによるパフォーマンス。8月27日に大ホールで行われたコンサートの主な演奏者でもあるマルガサリは、日本のガムラングループの中でも特殊な存在であり、古典から現代曲、さらには異分野のアーティストやコミュニティとのコラボレーションなど、そのレパートリーの広さ、挑戦的な試みの数々で知られる。En-gawaでは古典曲でも現代曲でもない、ガムランを用いた即興的なパフォーマンスを演じた。通常の奏法ではない方法で楽器に触れたり、音を出してみたり、果てはその場で楽器を解体してしまったり、と。舞台上はまさにカオスとなり、聴衆の目の前でガムラン「音楽/演奏」に対する固定観念が見事に覆される出来事が繰り広げられた。この「パフォーマンス・アート」的な作品提示の仕方は、マルガサリのメンバーの中に美術（視覚芸術）の専門家がいることも関係しているが、「ガムラン（の楽器）で表現する」という根源に立ち返った時に見えてくる地平の一つとも捉えられる。この表現手法はガムランの外側にいる人々（表現者・聴衆を含め）にとっては比較的ポジティブに受け入れやすいが、内側にいる人々にとっては（先のインタビューで中川教授が言われたように）衝撃が大きい。境界を侵犯し、揺さぶる力をもってしまったという逆説的な現象も印象深かった。

最後に、大ホールでのコンサート「Music in the Universe」の終曲となった野村誠作曲の《タリック・タンバン》。大ホールにはブルーローズのような空間的仕掛けは施されていないが、作品提示の仕方には挑戦的な工夫が随所に施されていたと言える。「綱引き」を意味するインドネシア語をタイトルとするこの作品は、ジャワガムラン、ルバブ、相撲（すもう/すまい）、ウィスキーボトル（サントリーの！）、ダジャレ音楽、声（甚句）、（野村氏自身による）合図、少年少女合唱隊による合唱、そして綱引きといった要素からなる。バラバラに思えるこれら単語の羅列から互いの関連性を見出し、一つの作品としての調和を理解することは難しいだろう。上演中でさえ「なんて無茶な作品！」と圧倒され続けた結果、それを頭で理解することはほぼ諦め、この祝祭的パフォーマンス空間にわたしがあることの満ち足りた幸福感を味わうばかりであった。混沌としながらも調和する世界観、ジャワガムランから着想して先に述べた多様な要素を「つな」ぎながら綱引き（タリックタンバン）へと至る道筋については、野村氏のプログラム・ノート注に明瞭な解説が記されているのでご一読いただきたい。そこから、作品が生み出された背景と野村氏によるガムランの解釈について、最後に少しだけ引用する。

注　野村 誠 『タリック・タンバン』（2023）［世界初演］プログラム・ノート
https://www.suntory.co.jp/suntoryhall/article/detail/001257.html（2023年10月2日 参照）

2. 特報

プロデューサーの三輪眞弘さんから、新作ガムランの委嘱を受けた際、「生き延びるためのガムラン」、「人類の叡智としてのガムラン」、「永遠」という3つのお題をいただいた。… 単なるコンサートではなく、未来の音楽や社会を考える集会としての「ハイパー・コンサート」をやりたいと、三輪さんが燃えているのだ。この意気込みに、ぼくは作曲家として応答すべく、新作『タリック・タンバン』を作曲した。

「ガムランとは何か？」。… ぼくにとっての「ガムラン」を敢えて一言で言えば、「相互にケアする」ことだ。ガムランの演奏は、常にお互いの演奏を聴き合い、互いに呼応し合う関係性の網目だ。… 指揮者のタクトではなく、スコアによるのではなく、お互いの音を聞き合い、相互に対話するように音を出すこと。そうした集積としてのアンサンブル。全員が当事者として参加すれば、アンサンブルは有機的に膨らんでいくはずだ。

ガムランというメディアを介して、Music in the Universe（宇宙の音楽）という壮大なテーマと大真面目に向き合うプロデューサー、作曲家、アーティスト、パフォーマー、スタッフたち。さらに、聴衆もその外側で高みの見物をするのではなく、そこに集う一員として巻き込まれていく。固定観念や境界を揺さぶられた先に人々が出会う世界の有り様は「ありえるかもしれない、ガムラン」が私たち（の社会）に問いかけたメッセージなのではないだろうか。

2. 特報

「サントリーホール サマーフェスティバル 2023
ザ・プロデューサー・シリーズ 三輪眞弘がひらくありえるかもしれない、ガムラン」
４日間のタイムテーブル

<table>
<tr><th>2023/8/24（木）</th><th>2023/8/25（金）</th><th>2023/8/26（土）</th><th>2023/8/27（日）</th></tr>
<tr><td rowspan="11"></td><td colspan="3">プロジェクト型コンサートEn-gawa開館中、ブルーローズホールでは常設プログラムとして①「越境屋台」と②「ポップアップ露店」、③「ありえるかもしれない、ガムラン」（三輪眞弘とマーティン・リッチズとの共同制作）によるサウンドインスタレーション作品のガムラン・バージョン"Thinking Machine"による「時報」が設置されていた。＊大ホールでのコンサート「Music in the Universe」以外は全てブルーローズで行われた。</td></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td rowspan="3"></td><td>10:00-10:15
「ジャワガムラン」デモンストレーション by 東京音楽大学ジャワガムラン同好会</td></tr>
<tr><td>10:15-10:40
《礼拝》（三輪眞弘作）by 佐久間新、相愛大学、ARシステム開発</td></tr>
<tr><td>10:50-11:50
「ジャワガムラン」ワークショップ by 東京音楽大学ジャワガムラン同好会
＊佐久間ウィヤンタリによる即興舞踊あり</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>12:00-13:00
ダンスパフォーマンス（観客参加型） by 佐久間新、だじゃれ音楽研究会</td></tr>
<tr><td>13:00-開場</td><td>13:00-14:00
スンダ（西ジャワ）の「ガムラン・ドゥグン」演奏　by パラグナ・グループ
＊佐久間新、佐久間ウィヤンタリによる即興舞踊あり</td><td>13:00-13:40
空間制作プロセスのドキュメンタリー映像上映</td></tr>
<tr><td>13:30-14:30
ガムランによる即興クリエーション by 野村誠、だじゃれ音楽研究会</td><td>14:00-14:30
バニュマス地方の竹ガムラン「チャルン」の演奏 by KULU-KULU
＊佐久間新、他の出演団体による即興舞踊あり</td><td rowspan="3">14:00-15:30
影絵パフォーマンス by 川村亘平斎、HANA、トンチ</td></tr>
<tr><td></td><td>14:40-15:00
《修行》（三輪眞弘作）の演奏　by マルガサリ</td></tr>
<tr><td>15:00-15:20
《修行》（三輪眞弘作）の演奏　by マルガサリ</td><td>15:00-15:30
バニュマス地方の竹ガムラン「チャルン」のワークショップ by KULU-KULU</td></tr>
<tr><td>16:00-17:00
アートプロジェクトをめぐるクロストーク by 野村誠、北澤潤（KITA）</td><td>16:00-16:30
ジャワガムランによるパフォーマンス　by マルガサリ</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>17:00-17:25
《礼拝》（三輪眞弘作）by 佐久間新、相愛大学、ARシステム開発</td><td>17:00-20:00＠大ホール
Music in the Universe
１）《ピアノとガムランのためのコンチェルト no.2》（藤枝守作）2023 年世界初演
２）《Sin Ra》（宮内康乃作）2023 年世界初演
３）《ゴングと竹のための音楽》（ホセ・マセダ作）1997年
４）《Legit Memories（組曲 甘い記憶）》（小出稚子作）2023 年世界初演
５）《タリック・タンバン》（野村誠作）2023 年世界初演
出演：マルガサリ（ガムラン）、砂原悟（ミニピアノ）、つむぎね（声）、ほんまなほ（ルバブ）、野村誠（指揮・合図）、伊﨑善之（龍笛）、中川日出鷹（コントラファゴット）、中谷満と相愛大学音楽学部打楽器合奏団（打楽器）、東京少年少女合唱隊（合唱）、さとうじゅんこ（歌）、植川縁（サクソフォーン）、だじゃれ音楽研究会（ウィスキーボトル）、岩本真輝（相撲：すもう）、佐久間新（相撲：すまい）、鶴見幸代（声）</td></tr>
<tr><td>17:20-17:45
《礼拝》（三輪眞弘作）by 佐久間新、相愛大学、ARシステム開発</td><td>17:30-19:10
ガムラン・ドゥグンによるコンサート　by パラグナ・グループ
＊浅野瑞穂と浅野瑞穂舞踊研究生による舞踊あり</td></tr>
<tr><td>18:00-18:45
オープニングコンサート(限定公開)
プロデューサー（三輪眞弘）とディレクションチーム（美術：KITA）による企画についてのトーク、マルガサリによる参加型パフォーマンス</td><td>18:00-18:45
ありえないかもしれないガムラン・コンサート by 野村誠、だじゃれ音楽研究会、佐久間新</td></tr>
<tr><td></td><td>19:00-20:00
夏の夜の座談会「ガムラン・アセンブリー」
ホスト：三輪眞弘、ゲスト：芥川作曲賞ノミネート作曲家と過去の受賞者 計4名によるトーク</td><td>19:20-20:00
夏の夜の座談会「ガムラン・アセンブリー」
ホスト：三輪眞弘、ゲスト：Universe in the Musicの4名の作曲家、KITA代表、マルガサリ代表</td></tr>
</table>

3. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

3-1. 国際学会・機関の情報（舞踊学・演劇学・音楽学・パフォーマンス研究）

①東洋音楽学会

小林敦子（明治大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	（一般社団法人）東洋音楽学会
英語訳名	The Society for Research in Asiatic Music
学会設立年	1936（昭和11）年
事務局（場所）	〒110-0005東京都台東区上野3-6-3　三春ビル307号 TEL/FAX：03-3832-5152　　E-mail：LEN03210@nifty.com
HP	http://tog.a.la9.jp/
趣旨・大会情報等	東洋音楽の研究者、日本音楽の研究者、比較音楽学（民族音楽学の前身）の研究者らが中心になって、日本を含む東洋諸国の音楽を研究することを目的に設立されました。今年は第74回大会が、11月18日（土）～19日（日）に京都教育大学藤森キャンパスで対面開催され、非会員も1500円の参加費で19日の一般研究発表のみ参加できます。連絡先は第74回大会実行委員会：tog74taikai@gmail.comです。
ジャーナル	機関誌『東洋音楽研究』（the journal of the Society for the Research of Asiatic Music）が年1回発行されます。投稿には会員であることが必要です。『東洋音楽研究』は一般書店からも注文・購入が可能（ISSN 0039-3851）であり、2007年までの記事については、独立行政法人科学技術振興機構(JST)が運用するJournal@rchive (ジャーナルアーカイブ)に公開されています。また2003年発行以降の機関誌の目次はHPでも 確認できます。
入会方法	HPより入会申込書をダウンロードし記入したものを事務局に送信し、事務局からの返信後年会費を納入して入会となります。一般会員は8000円、学生会員は6000円で、学生会員にはいくつか要件がありますのでHPでご確認ください。

2. 当該学会に参加して

この学会は戦前の社会情勢を反映して東洋音楽に特化した研究をする学会として設立さましたが、現在では広く世界の音楽がトピックとして取り上げられ、音楽的側面の研究が含まれた舞踊研究も発表されています（舞楽、ジャワ島の舞踊劇、風流踊など）。国際伝統音楽学会（ICTM）に日本国内委員会として加盟しており、筆者も日本の民俗舞踊の音楽に関して発表させて頂いたことがありますが、会議場では学会員の方が多く心強かったです。

またこの学会は会員数が600人程と大きいため、東日本、西日本、沖縄と3つの支部があり、支部ごとに年6回もの定例研究会が開催されています。例年3月及び4月は卒論・修論発表会が、その他の月には学会員の研究発表や調査報告などが行われます。学会員以外でも聴講は原則的に無料で可能です。定例研究会の内容は学会ホームページに掲載されますので、まずは近隣の支部の定例研究会に参加されてみてはいかがでしょうか。

3. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

3-2. 国際学会・機関の情報（舞踊学・演劇学・音楽学・パフォーマンス研究）

②日本演劇学会

宮川麻理子（立教大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	日本演劇学会
英語訳名	Japanese Society for Theatre Research
学会設立年	1948年
事務局（場所）	玉川大学芸術学部演劇・舞踊学科内 〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1大学教育棟4F
HP	https://jstr.org
趣旨・大会情報等	日本演劇学会は、1948年に設立され、演劇に関連するあらゆる分野（西洋・東洋演劇、日本の民俗芸能や能楽・歌舞伎といった伝統芸能、大衆演劇、パフォーマンス、ダンス、さらに映画、TVまで）の研究者が所属しています。テキスト分析、上演分析、歴史研究、理論研究など、それぞれの研究者が多様なアプローチで演劇的事象を分析しています。 毎年夏に開催される全国大会、秋に開催される研究集会では、毎回テーマが設定され、関連した研究発表が行われます。また4つの分科会（日本近代演劇史研究会、近現代演劇研究会、演劇と教育研究会、西洋比較演劇研究会）が開催する例会での発表機会もあります。
ジャーナル	演劇学論集 日本演劇学会紀要 English Journal of JSTR （いずれもJ-STAGEで全文公開）
入会方法	日本演劇学会HP内のフォーム（https://jstr.org/join/）から申請可能です。

2. 当該学会に参加して

日本演劇学会では、例年6月に全国大会、秋に研究集会を開催しています。次回の全国大会は、2024年6月に明治大学で予定されています。毎回テーマが設定されていますが、テーマに関連していなくても発表への応募は可能です。一般研究発表のほか、ゲストを招いての基調講演、前夜祭として特別イベントなども併せて開催されます。メインとなるのはやはり演劇関連の発表（戯曲や作品分析、演劇の教育効果の検証など）ですが、毎回舞踊関連の研究発表もあり、例えば2023年の全国大会では琉球宮廷舞踊に関する発表が、この秋の研究集会ではダンサーの森田かずよ氏もパネリストとして参加するセッションが企画されています。

日本演劇学会は年に2回ほど『演劇学論集 日本演劇学会紀要』を刊行しています。さらに、英語の紀要『English Journal of JSTR』によって、海外にも日本の演劇研究を発信しています。また日本近代演劇史研究会、近現代演劇研究会、演劇と教育研究会、西洋比較演劇研究会と4つの分科会がありますが、それぞれに研究集会を開催し、若手に発表の機会を提供しています。各分科会が発行する紀要『西洋比較演劇』『近現代演劇研究』（2008～2018年）『演劇教育研究』もあり、演劇研究者の層の厚さを感じさせます。

4. 私にとっての在外研究

「海外生活の綱渡りから学んだこと」

岡田万里子（桜美林大学）

1. 基本情報

渡航先(都市・国名)	1. パリ・フランス 2, 3. アナーバー・ミシガン州・アメリカ
研究機関	1. パリ第4大学ソルボンヌ校極東研究センター(chercheuse invitée, Centre de Recherche sur l'Extrême-Orient de Paris Sorbonne (CREOPS)) 2, 3. ミシガン大学日本研究センター (Center for Japanese Studies, University of Michigan)
在外期間	1. 2009年11月～2010年11月 2. 2012年9月～2013年4月 3. 2013年5月～2014年3月
目的	1. 日本文化研究 2. ミシガン大学における授業担当及び日本研究 3. 日本文化研究
研究プログラム	1. 日本学術振興会 優秀若手研究者海外派遣事業(特別研究員) 2. ミシガン大学日本研究センタートヨタ招聘教授(Toyota Professor) 3. ミシガン大学日本研究センター客員研究員(visiting Scholar)
グラント申請方法	1. 優秀若手研究者海外派遣事業第1回公募に応募。書類審査。 2, 3. ミシガン大学日本研究センター殿村ひとみ教授の推薦をいただき応募。3は無給の研究員。

2. 在外研究を終えて

在外研究を行ったのは就職が決まる前のことだったので、就職前の方の役に立てばと思い、執筆させていただくことにしました。就職後、二カ国の海外経験を高く評価していただいたことを知り、在外研究をしていなかったら就職もできていなかったのではないかと思います。今後はますます海外経験が求められると思いますので、チャンスを捉えていただきたいと存じます。

在外研究を通じて、海外の研究や教育に触れたことは、全てにわたり、影響を与えています。研究では対象を大局的に見られるようになりました。私が研究している京都の祇園の京舞は、分かる人にだけ分かるという花街文化のなかで継承され、私の研究も知らず知らずのうちに、そうした読者を選ぶものになっていたと思います。しかし、海外で研究したことにより、同じ事例を扱っても、それを理論化して他の事例にも通じる観点を提示することを心がけるようになりました。また、たとえば、授業で映像を見せるときに教室を暗くする際、「これから暗くしますが大丈夫ですか？」と聞き、見せる映像の内容も説明します。多様性に配慮し、なにごとも言葉で明確に説明すること、知識よりも考える力を重視すること、おかしいと思えば声をあげることなど、オンとオフを区別することなど、教室から生活にいたるまで、海外生活の影響を受けていないことはなく、この2回の海外生活の以前はどうしていたのだろうかと思うほどです。

4. 私にとっての在外研究

日本舞踊を研究する私にとって、資料も舞台も実演者も日本に揃っており、研究は日本にいてこそ可能なものと、大学院在学中などは在外研究をそもそも考えることがなかったように思います。それが大きく変わったのは、20代後半で早稲田大学演劇博物館助手として、「世界の中の日本演劇」ミュンヘン展の関連イベントとして行われた国際研究集会に参加し、海外の日本演劇研究の自由な発想や論理的な構成に触れたことによります。

しかし、それから海外で研究発表をするようになるまでには、5年かかりました。任期付き研究員の契約がなくなり、非常勤生活にはいった2003年に、コーネル大学のジェーン・マリー・ロウ先生のご紹介でパネルに入れていただき、はじめてヨーロッパ日本研究協会で英語による発表をしました。これは日本の文化遺産に関する書籍刊行プロジェクトで、はじめて本格的な英語論文を書き、Making Japanese Heritageというタイトルで Routledge社から2009年に刊行されました。ヨーロッパ日本研究協会に参加すると、日本研究のネットワークができ、特にお世話になったのが、パリ第4大学ソルボンヌ校のシルビー・ギッシャー=アンギス先生で、2004年にシンポジウムに呼んでくださり、親交を深めてきました。

英語で研究発表することに挑戦したいと思い、私の専門分野について発表できる学会を調べて、自分で初めて応募してみたのは、2009年3月にシカゴで開催されたAssociation for Asian Studiesでした。今から振り返ると、この時点で「世界の中の日本演劇」ミュンヘン展からすでに10年が経過しており、非常に遅々とした歩みだったと思います。インターネットも普及してはいましたが、雲を掴むように調べていた記憶があります。一度、応募して通ると、手順もわかり、それからは積極的に海外の学会で報告を重ねるようになりました。2009年のシカゴでは、ミシガン大学の殿村ひとみ先生と出会い、後にミシガン大学日本研究センターのトヨタ客員教授への応募につながることになります。

2009年4月から学術振興会特別研究員RPDに採用され、在外研究もしてみたいと思っていたときでした。最初は新聞記事だったと思います。「優秀若手研究者海外派遣事業」という5年間で1.5〜3万人の研究者を海外へ武者修行させるという助成金が補正予算で設けられたことを知りました。記事は揶揄するような書きぶりで、案の定、同年7月の選挙で政権交代した民主党が、2回目の募集で廃止しました。特別研究員の受入をしてくださった東京大学の長島弘明先生からの勧めもあり、私は1回目に応募しました。告知から締切まで一ヶ月程度だったように思います。受入機関からの招聘状も提出しなければならず、準備していなければ応募できませんでした。ギメ美術館やフランス国立図書館の日本関係資料を研究したいと考え、ギッシャー=アンギス先生に受入をお願いして、書類を整え、採用されました。応募者も少なかっただろうと思います。往復の交通費と毎月16万円の滞在費というささやかなもので、さらに開始が遅れたため、私は行きの航空券は自費で支払って、予定通り出発しました。

4. 私にとっての在外研究

そもそも私のフランス語は第二外国語程度だったので、言語には苦労しました。その上、昼間は図書館で日本語の資料を読んでいる訳ですから、フランス語が上達する訳がありません。しかし、所属した研究所の大学院生たちが食事に誘ってくれ、フランス語会話の練習につきあってくれました。発表原稿は自分で書くのですが、それを大学院生の友人が直し、音読を録音してくれました。私は、それを聞いて練習し、質疑応答はなんとか切り抜けて、発表を終えました。その時に感じたのは、母校の早稲田大学に来ていた多くの訪問研究者や大学院生たちに、私がこんなに親切にしただろうかということです。日本演劇を専攻し、日本語を流暢に話す人たちでしたが、もっと一緒に食事をしたり、研究に協力したりするべきだったと、深く反省し、それからの身の振り方に影響を与えました。

フランスから帰国して、古井戸秀夫先生のご指導を受け、博士論文を完成させました。しかし、それでも就職は決まらず、ミシガン大学トヨタ客員教授に応募しました。このプログラムは研究だけでなく、授業も持たなければなりませんでした。受け入れてくださった殿村ひとみ先生と共同で、歴史学部で授業を持ちました。留学経験のない私にとって、アメリカの大学の授業を経験できたことは非常に有益でした。また、日本研究センター所属の研究者との交流からも、在米中に参加した学会のネットワークからも、多様な研究的視点を得ることができました。また、この期間に、博士論文を書籍として出版することもできました。出版社とはメールのやりとりでしたが、かえって海外で資料にあたれなかったことが、出版まで早くさせたのかもしれません。慣れない英語での授業準備に追われはしても、それまでの非常勤掛け持ちの生活と異なり、落ち着いて研究に取り組めたことは大きな成果でした。

トヨタ客員教授の期間が終わろうとしても就職がなかったため、無給の研究員として受け入れていただき、ミシガンでの生活を一年間延長することにしました。やはり殿村先生のご配慮で、くずし字解読ワークショップなどを担当させていただき、少し収入を得ることはできました。また、少しでも就職の可能性を広げるために、日本語教育の講座も履修しました。ワークショップや講座を通して、人脈が広がりました。応募した桜美林大学に就職が決まり、予定より早めて3月に帰国することになりますが、二年目のミシガン滞在で忘れがたいのは、サントリー学芸賞を受賞した際の経験でした。授賞式に帰国することを殿村先生に告げたところ、日本研究センターの教職員や学生だけでなく、催しの参加者や支援者も含むコミュニティ全体にディレクターから告知があり、受賞記念講演を企画していただきました。大学院生から任期付きの助手やポスドク研究員を経て専任非常勤となり、所属がなかった私は、組織やコミュニティに属することの温かさを感じました。同時に、あるべきコミュニティの姿も学んだように思います。

来年、2024年の秋から再びミシガン大学で学究生活を送らせていただくことになりました。2014年3月に帰国してから10年ぶりですが、日本の大学での10年を経て行くアメリカは、また違って映るものと思います。初めての在外研究は30代後半と遅くなってからのチャレンジで、出発前は不安で仕方がありませんでしたが、これによって道が開けました。チャンスが到来したときに逃さないよう、常に準備しておくことをオススメします。

5. 国際学会・シンポジウム発表報告

EAJS 2021: 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies

山田小夜歌（京都精華大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	European Association for Japanese Studies 【略名】EAJS
日本語訳名	ヨーロッパ日本研究協会
学会設立年	1973年
事務局（場所）	ベルリン自由大学　東アジア研究センター
HP	www.eajs.eu https://www.geschkult.fu-berlin.de/e/oas/japanologie/institut/projekte/EAJS/index.html
趣旨・大会情報等	EAJSは日本研究、日本学にかかわる世界最大規模の研究者団体で、国際会議はヨーロッパと日本で3年ごとに開催されています。今回参加報告する大会は、当初2020年にゲント（ベルギー）で開催予定でしたが、パンデミックにより翌年に延期、オンライン開催となりました。2023年8月17日～20日には、ゲントで第17回国際会議が対面で開催されました。
ジャーナル	なし
入会方法	指定の申込書に記入・署名し、事務局宛に郵送またはファックスで送付します。メール添付での申し込みはできません。会員資格は3年間有効で、会費は機関会員180€、個人会員90€、学生会員45€です。

2. 学会大会の現況

2021年8月24日（火）～28日（土）に開催されたヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の国際会議に初めて参加しました。1973年に設立されたEAJSは、日本を専門とする学者・研究者の団体で、その目的はヨーロッパ、日本、そして世界各国における日本研究への関心を喚起し、研究を促進すること、とされています。協会HPによると2017年大会、そして2021年大会とも40カ国以上から1,170名～1,200名近くの参加者があったようで、EAJS国際会議は、世界の日本研究と東アジア研究の分野における主要な学術イベントの一つとしての機能を担っています。

EAJS2021は、上でも触れたとおり、当初は2020年8月にベルギーのゲントで開催される予定でしたが、新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより延期となりました。延期後の大会も当初は対面での開催が予定されていましたが、2020年9月末頃には全面オンラインでの開催となることが周知されました。私自身、はじめての国際会議への発表参加ということもあり、刻々とかわる情勢の中で、もし対面開催になったら渡航できるのか、オンライン開催だったとしても時差やネットワークなどは問題ないかといった不安が常にありました（もちろん、当時は誰もがそうだったことでしょう）。

5. 国際学会・シンポジウム発表報告

実際に開催されたEAJS2021では、言語学、歴史、文学、哲学、宗教、視覚芸術、経済、政治学・国際関係論、都市・地域・環境など13のセクションに分かれて複数のパネルセッションが実施されたほか、基調講演やパフォーマンス、ラウンドテーブルなど、5日間で様々な企画が展開されました。画面上でみる膨大で充実したタイムテーブルには、とても驚き圧倒されたことを覚えています。私は、舞台芸術（Performing Arts）セクションの中の「Interdisciplinary Performance Encounters」というパネルセッションで「大正期日本におけるバレエの黎明：G.V.ローシーの活動に着目して」との演題で発表を行いました。与えられる発表時間は各パネルの発表者数によって決められていて、私が参加したパネルでは一人20分の発表、その後に質疑応答と意見交換という流れでした。

実のところ、発表エントリー当時の私はEAJSのことをまったく知りませんでした。2019年末に舞踊学会のメーリングリストで発表者募集の告知をいただいて、初めて同協会を認識したような状況でした。発表エントリーを決めたのは、私の研究内容を知る複数の先生に「発表してみてはどうか」とのアドバイスをいただいたことです。また、日本語での発表が可能だということも後押しになりました。EAJS国際会議では、発表エントリーの際には英文要旨の提出が必要ですが、口頭発表については日本語での発表も認められています。私自身は、日本語と英語の発表原稿をそれぞれ用意し、発表の直前までどちらの言語で行うか悩みましたが、結局、発表スライドは日英併記にして、発表自体は日本語で行いました。

国際会議は、自身の研究を日本語を母語としない方にも広く知っていただき、相互に意見交換をすることが大きな目的のひとつだと思います。その意味においては、日本語での発表はバリューレスかもしれません。他方で、たとえ日本語であっても短時間で伝えるのが難しい研究発表を慣れない外国語で行うというのは、ハードルが高いということも事実です。国際会議での使用言語をめぐっては様々な考えがあると思いますが、個人的には、EAJSのように発表言語を選択できるシステムはとてもよいと思います。言語問題を気にすることなく発表に集中できる会議環境は、表面的ではない深い研究上の議論を可能にしてくれるからです。EAJSの場合は、単純に発表者が言語を選択できるというだけではなく、招集者および司会の先生方によるフォローアップなど、参加者の言語ギャップを埋めるための運営側の配慮も整っており、安心して発表に集中することができました。

私の研究では日本にバレエを移入した外国人舞踊家ローシーのことを主に扱っていますが、これまで海外の方に本内容を紹介する機会はあまりなかったので、どのような反応をいただけるのか、とても興味がありました。質疑応答の時間では、ローシーの経歴の調査とその方法についての質問や感想をいただき、歴史研究としての精緻な史料調査の意義をあらためて認識させられました。

5. 国際学会・シンポジウム発表報告

また、ローシーが招聘された帝国劇場の当時のあり様や、国家政策と文化事業との関連などについても指摘をいただきました。さらに、国際会議終了後、複数の外国人研究者の方から連絡をいただいたのですが、彼らの視点は政治や文化外交、文化政策、劇場文化、移民などの都市環境など非常に幅広く、正直とても驚きました。私の発表セクションには「Interdisciplinary Performance Encounters」というタイトルが付いていましたが、まさに「学際的」であることを実感しました。

少し余談ですが、現職場で働きはじめてから日本や日本文化を扱う国内外の研究者と多く関わるようになりました。彼らの主なフィールドや研究対象はそれぞれまったく異なりますが、やはりどこかで「国際社会の中の日本と日本文化」というような、EAJSにも共通する視点が通底していると感じています。私はバレエを事例に日本への文化移入を扱っていますが、たとえ一部地域間における文化の消化吸収のありようであっても、それを国際社会という視点から見渡す視野に欠けていたことを痛感しています。舞踊学に立脚しつつも、つねに広い視野をもって「学際的」に見つめなければならないという思いを強くしました。

6. 委員会より

6-1. 学会誌編集委員会･･･八木ありさ

学会誌『舞踊學』には、査読を経て受理された投稿論文（3月末日締め切り）の他にも、会員の皆様の著作情報が掲載されます(単著、共著、翻訳。ただし舞踊学関連書で、本人から報告のあったもの一人5点以内に限る)。 ご著書を出版されました際には随時メールにて学会誌編集委員会(buyogaku.editorial@gmail.com)までお知らせください。

6-2. 2023年度学会大会･･･海野敏

2023（令和5）年度第75回舞踊学会大会は、2023年12月2日（土）～3日（日）、東洋大学の白山キャンパスにおいて開催いたします。詳細は、学会HPおよび本ニューズレターの「第75回舞踊学会大会のご案内」をご覧ください。

6-3. 例会企画運営委員会･･･森立子

本年度の定例研究会（例会）は、６月10日（土）にオンライン（zoom）で開催されました。６演題の研究発表それぞれの後、これを受けての活発な質疑応答がかわされ、充実した学術交流の一日となりました。お力添えをいただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

なお来年度の定例研究会もオンラインで開催いたします。研究発表募集は2024年４月頃となる予定です。皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。

6-4. 研究奨励賞選考委員会･･･貫成人

2023年度の研究奨励賞授賞候補の推薦締切は2023年3月31日であったが、同日までに推薦はなく、また、奨励賞委員四名からも候補は出なかったため、本年度の研究奨励賞は「該当者なし」となった。

6-5. HP管理委員会･･･寺山由美

シンポジウムやワークショップ、研究会、展示の開催や、研究助成金の募集などの学術的な情報を、以下のアドレスまでお寄せ下さい。会員の皆さまと共有致します。情報は以下のアドレスまでお送り下さい。

jouhou-dance-hp@kir.jp（舞踊学会HP管理委員会）

皆さまからの情報をお待ちしております。

※ML配信やHP掲載の手続きに時間を要するため、余裕をもってご連絡下さい。

6. 委員会より

6-6. 学術連合委員会

藝術学関連学会連合報告･･･貫成人

1. 2022年11月26日（土）、ZOOMによって令和四年度第二回委員会が開催され、第17回公開シンポジウムを、「芸術と平和/戦争」というテーマで2023年6月3日（土）13時～17時30分、広島平和記念資料館メモリアルホールにて、対面で開催することとなった。オーガナイザーは、広島芸術学会、日本デザイン学会、服飾美学会が担当。パネリストは、年内に応募要項を周知し、2023年3月までに決めることとなった。

2. 2023年6月3日午前、令和五年度第一回委員会が広島平和記念資料館において開催され、事務局長の旅費、2024年度第18回公開シンポジウム募集要項について審議された。

3. 同日午後第17回公開シンポジウム「芸術と平和/戦争」を開催した。

4. 2023年11月18日（土）、令和五年度第二回委員会を専修大学神田校舎で開催する予定である。

日本スポーツ体育健康科学学術連合･･･寺山由美

2023年度総会が6月17日にオンラインにて開催されました。出席団体数により総会は成立し、全審議事項が可決されました。

6-7. ニューズレター委員会･･･波照間永子

前号（20号）に続き、21号も「国内外の舞踊学関連機関の情報発信」をニューズレターの柱としております。

学会サーバの変更にともない、ニューズレターのメールアドレスが変更になりました。「情報コーナー」等に掲載したい情報がありましたらご連絡ください。

新アドレス　danceresearch.newsletter@gmail.com

7. 事務局だより

その1. 年会費納入のお願い

郵便払込だけでなく、銀行振込も受け付けております。

★郵便払込取扱票 口座記号番号：00960-5-154553 加入者名：舞踊学会

★銀行振込 ゆうちょ銀行 店番：068 口座番号：普通 1701147

★年会費：7000円

★ 昨年度より、年会費納入のお願いをメールにてお送りしております（2023年6月下旬）。さらに、今年度は2度目のお願いとして、10月上旬に書類も郵送させていただきました。メールが届いていない場合は事務局までご一報ください。

その2. 登録情報変更申請のお願い

年度が変わる時期などにお引っ越し等で住所が変わり、当学会からの郵便物などが届けられない、所在不明の会員の方が毎年増えております。メールアドレス、住所、勤務先等に変更のある方は、学会HPの「各種事務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のページにて変更後の情報をお寄せ下さい。もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。

HP：http://www.danceresearch.ac/jimu.htm

事務局メール： danceresearch.info@kagoya.net

★なお、舞踊学会の事務局メールアドレスが、令和5年1月より新事務局メールアドレスへと切り替わり、令和5年4月1日より新アドレスへ完全移行となります。

新事務局メール office@danceresearch.jp

★現在Web会員名簿を削除しております。お問合せがございましたら、事務局までご連絡ください。

舞踊学会事務局 酒向治子

8. 情報コーナー

「遠藤保子先生をしのぶ会」開催報告

遠藤保子先生をしのぶ会世話人
高橋京子（フェリス女学院大学）・野田章子（長崎女子短期大学）・林夏木（四国大学）

2023年8月29日、残暑の厳しい京都におきまして、立命館大学産業社会学部名誉教授の遠藤保子先生をしのぶ会を開催いたしました。当日は、卒業生、ご友人をはじめ、舞踊学会からも多くご来臨くださり、懐かしい映像と共に遠藤先生をしのびました。

黙祷を行った後、第一部はお二人からの懐かしいお話を伺いました。ご友人代表として舞踊学会会員でもいらっしゃる原田奈名子先生からは、遠藤先生がご生前、いかに勇気をもって人生を歩まれたかがよくわかる素敵なエピソードの数々を伺いました。

第二部では、思い出リレーと称して、マイクを回し、4名の方にお話をしていただきました。皆さまの様々なお話を通して、遠藤先生がいかにチャーミングで、いかにユニークで、そしていかに多くのご縁を繋いでくださっていたかがわかり、とても感慨深い気持ちになりました。

第三部は、遠藤先生に捧げるべく、ゲストによるアフリカンミュージックとダンスの披露でした。ゲストには西アフリカ、ブルキナファソのミュージシャン、ミロゴ・ベノワ氏を招き、天国の遠藤先生へ捧げました。次に、東アフリカのエチオピアンダンスを通じて、遠藤先生とは長年交流がおありでしたバーバリッチ優子さんのダンス、そこに天国の遠藤先生へ届けとばかりに即興的に多くの方々が参加して踊りました。きっと、遠藤先生も楽しんで、ご一緒に踊られていたことと思います。

コロナ禍で見送っておりましたが、遠藤先生の三回忌というタイミングで、ようやくしのぶ会を開催することができたことを心より感謝申し上げます。

編集後記・奥付

本年度のニューズレターで「特報」を担当したことは、社会の中で研究と実践をどうリンクさせるかを考える上でも貴重な機会となりました。取材にご協力いただいた皆様、有益なご助言をくださった委員の先生方に感謝申し上げます。（岩澤）

毎回有用な情報と、ご執筆頂いた先生方の研究者として、また生身の人間としての喜びや悩みを感じられる原稿を読ませて頂く機会となっています。今回もご多忙の中ありがとうございました。（小林）

いつものことですが、特に今号は足手纏いになるだけで何も働かなかった外山です。
ご協力いただいた先生方、ありがとうございました。委員の皆様、ごめんなさい。次はなんとかいたします（ガムランに日参したかった。。。）。（外山）

先生方の原稿を拝読しながら、コロナ禍で停滞していた海外との交流も、そろそろ本格化させていく時期かなと思いを馳せました。（宮川）

お忙しい中、貴重な原稿をお寄せいただいた先生方に感謝申し上げます。（武藤）

ご寄稿くださいました先生方に心よりお礼申し上げます。新型コロナウィルスが5類へ移行となり、対面形式による国内外の催しが復活しつつあります。オンライン併用も含め、研究成果や実践活動を広く分かち合うことが益々求められています。私は長く休眠状態だったので、ご執筆の先生方から「そろそろ起きたらどう？」と励まされたような心持ちです。感謝申し上げます。（波照間）

ニューズレター第21号
発行者：舞踊学会（会長：猪崎弥生）
発行日：2023年11月 1日
編集（姓の五十音順）：
岩澤孝子　小林敦子　高野美和子　外山紀久子
波照間永子　松澤慶信　宮川麻理子　武藤大祐

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は
以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター委員会
danceresearch.newsletter@gmail.com